

国内の畜産物の需給動向

牛肉

6年7月の牛肉生産量、前年同月比4.6%増

生産量

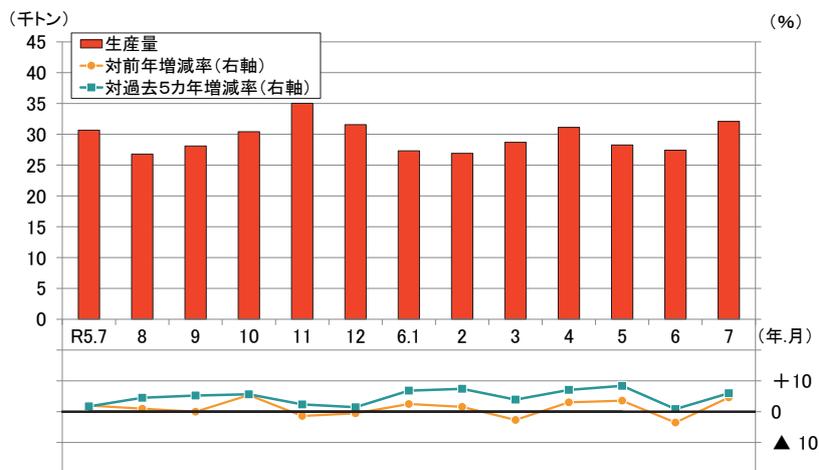
令和6年7月の牛肉生産量^(注1)は、3万2089トン（前年同月比4.6%増）と前年同月をやや上回った（図1）。品種別では、和牛は1万6954トン（同10.3%増）とかなりの程度、乳用種は6761トン（同2.6%増）

とわずかに、いずれも前年同月を上回った一方、交雑種は8210トン（同2.5%減）と前年同月をわずかに下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較では、6.0%増とかなりの程度上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

7月の輸入量は、冷蔵品は、国内需要の低迷により低調に推移する中、現地相場高の影響により米国産輸入量が減少したことなどから、1万8861トン（前年同月比2.6%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。冷凍品は、輸入品在庫量が多かったことにより

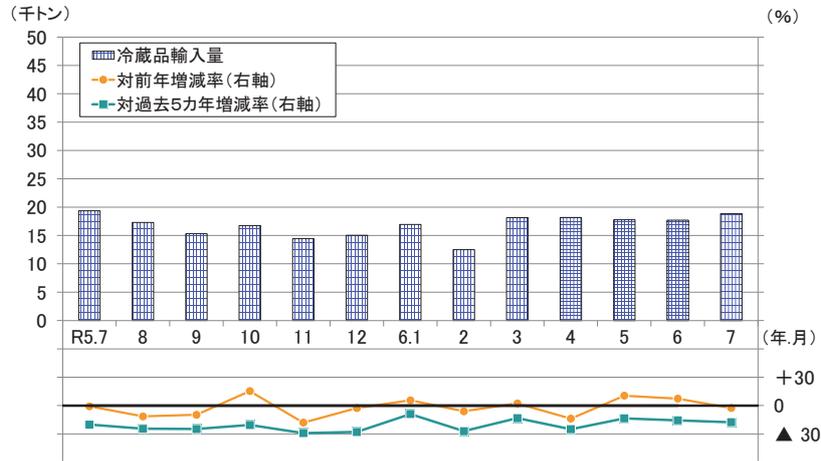
前年同月の輸入量が少なかったことに加え、豪州産およびニュージーランド産のうち主に加工用のひき材などに使用されるトリミングの輸入量が増加したことなどから、3万466トン（同57.8%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)では、4万9342トン（同27.5%増）と前年同月を大幅に上回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は17.6%減と大幅に下回った一方、冷凍品は6.4%増とかなりの程度

上回る結果となった。

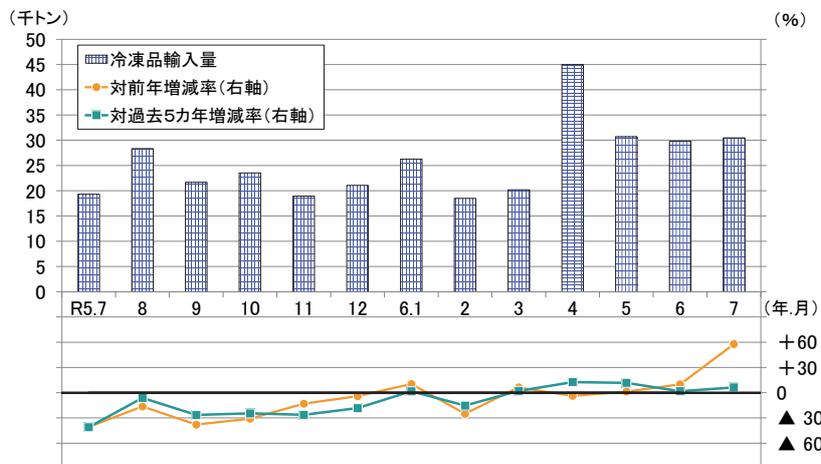
(注2) 輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

7月の牛肉の家計消費量(全国1人当たり)は143グラム(前年同月比12.9%減)と前年同月をかなり大きく下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較では、20.8%減と大幅に下回る結果と

なった。

7月の外食産業全体の売上高は、前年より土日が各1日少ない中、前年同様の記録的な猛暑により一部で外出を控える傾向も見られたものの、26日に開幕したパリ五輪により一部の業態でテイクアウト需要が伸びた他、訪日外国人需要も引き続き堅調だったことから、前年同月比4.3%増と前年同月を

やや上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、五輪開幕後のテイクアウト需要により、同0.9%増と前年同月をわずかに上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風も、24日の「土用の丑の日」にちなんだうなぎ販売キャンペーンが奏功し、同11.2%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、土日

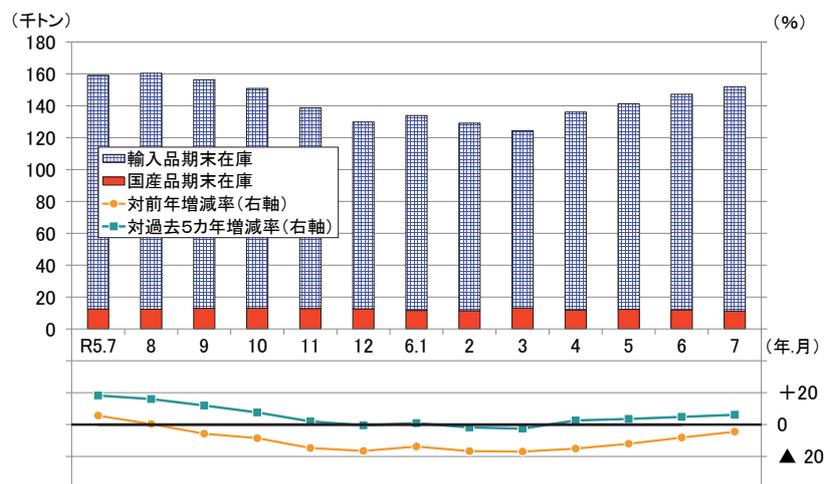
の少ない曜日回りの影響などにより、同1.5%減と前年同月をわずかに下回った。

推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫は、15万1998トン（前年同月比4.5%減）と前年同月をやや下回った（図4）。このうち、輸入品は14万727トン（同4.0%減）と前年同月をやや下回った。

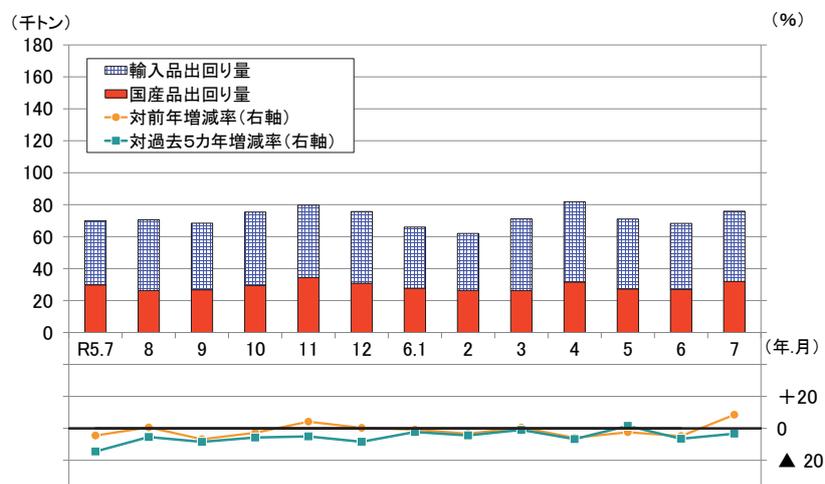
推定出回り量は、7万5914トン（同8.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図5）。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

このうち、輸入品は4万3959トン（同9.5%増）、国産品は3万1955トン（同7.2%増）と、ともに前年同月をかなりの程度上回った。

（畜産振興部 丸吉 裕子）

豚 肉

6年7月の豚肉生産量、前年同月比5.0%増

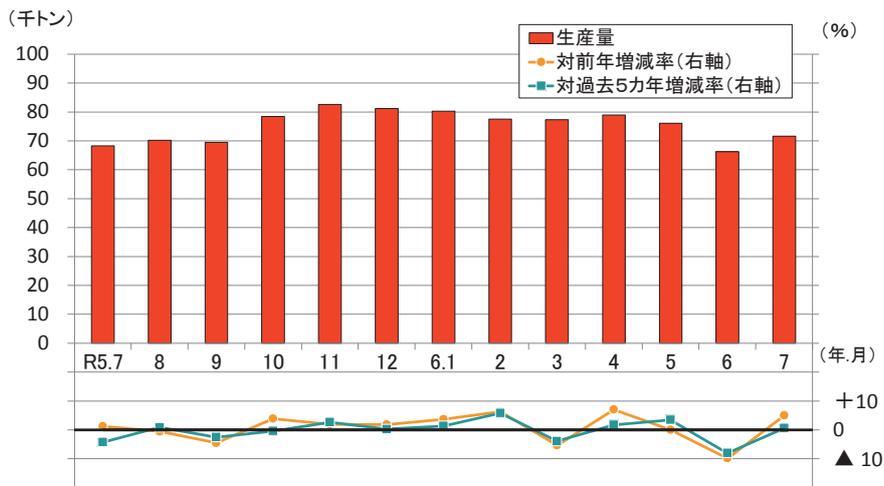
生産量

令和6年7月の豚肉生産量は、7万1679トン（前年同月比5.0%増）と前年同月を

やや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較でも、0.6%増とわずかに上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

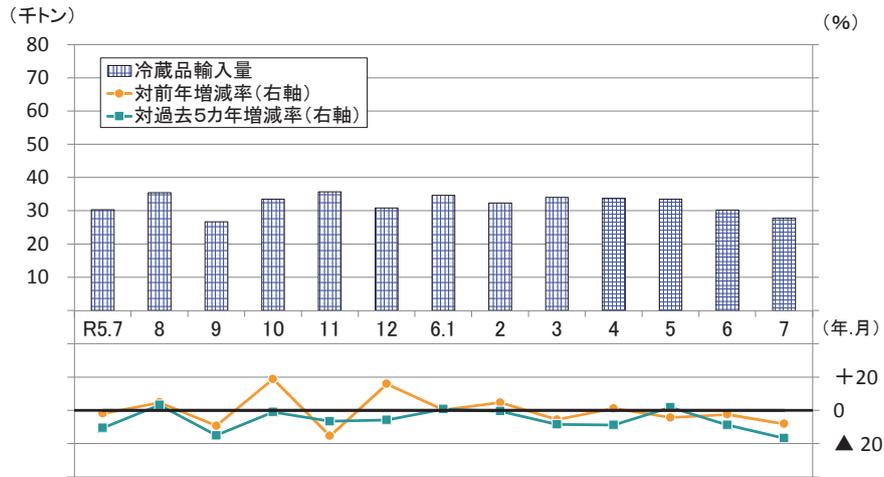
7月の輸入量は、冷蔵品は、現地相場高の影響により米国産輸入量が減少したことなどから、2万7818トン（前年同月比8.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。冷凍品は、メキシコを除くほとんどの主要国からの輸入量が増加したことなどから、5万8329トン（同30.9%増）と前年同月を大幅

に上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注)では8万6155トン（同15.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は16.8%減と大幅に下回った一方、冷凍品は29.2%増と大幅に上回る結果となった。

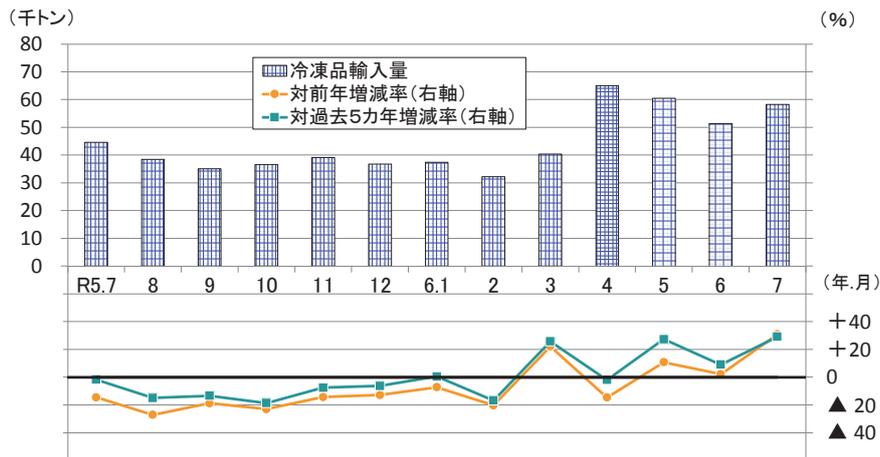
（注）輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

7月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、591グラム（前年同月比2.9%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、2.3%減とわずかに下回る結果となった。

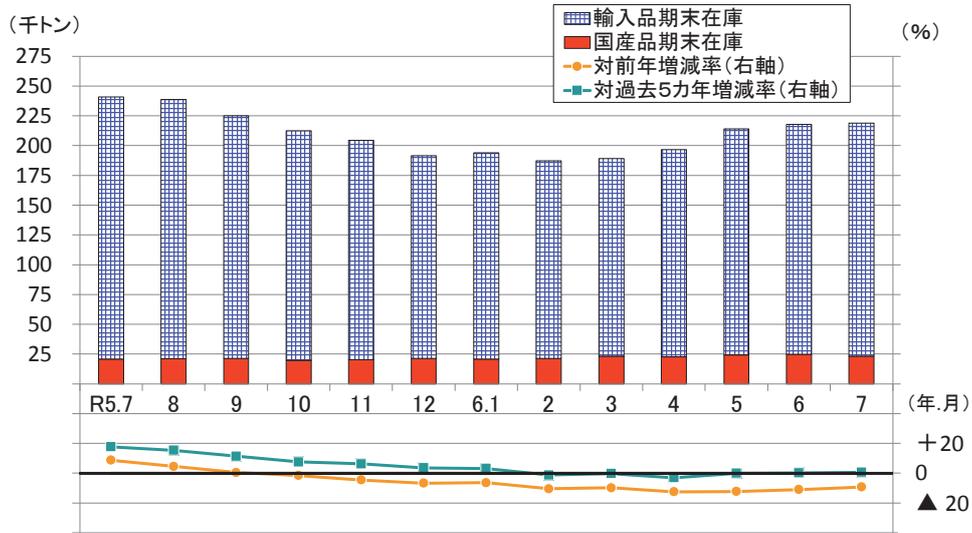
推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫は、21万8756トン

（前年同月比9.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図4）。このうち、輸入品は、19万5529トン（同11.2%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

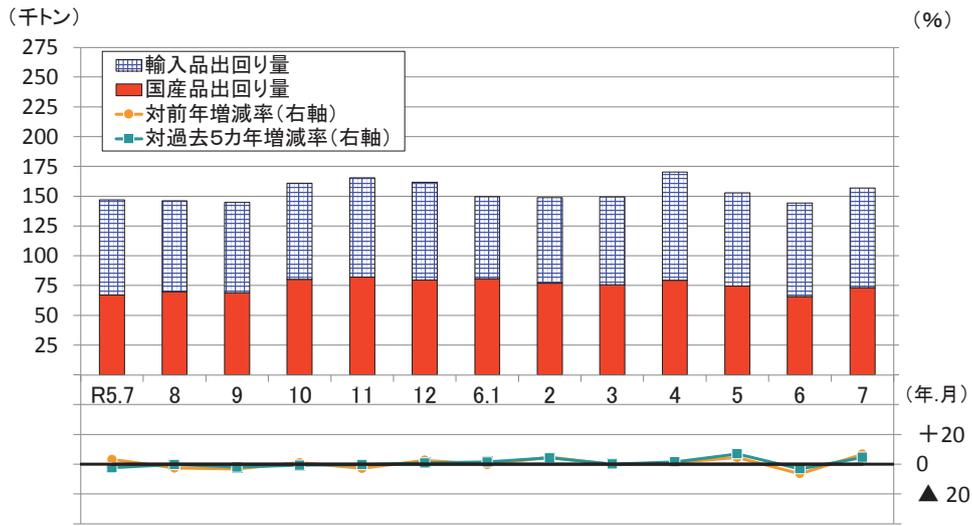
推定出回り量は、15万6883トン（同6.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図5）。このうち、国産品は7万3101トン（同9.2%増）とかなりの程度、輸入品は8万3782トン（同4.8%増）とやや、いずれも前年同月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏肉

6年7月の鶏肉生産量、前年同月比4.5%増

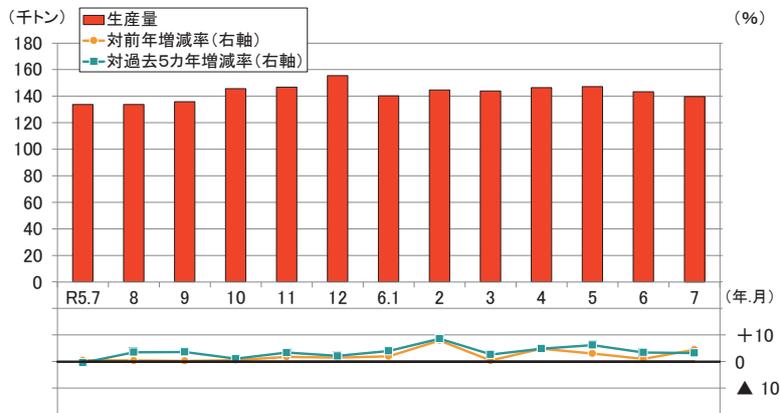
生産量

令和6年7月の鶏肉生産量は、13万9730トン（前年同月比4.5%増）と前年同月を

やや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較でも、3.2%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

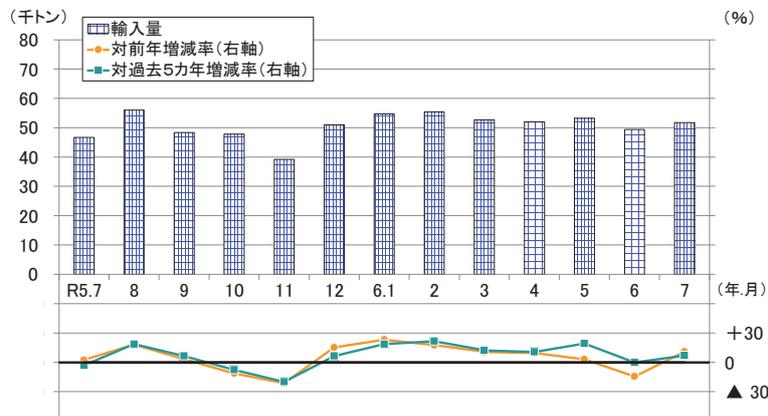
輸入量

7月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした堅調な鶏肉需要により、ブラジル産、タイ産ともに輸入量が増加したことなどから、

5万1778トン（前年同月比10.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較でも、7.0%増とかなりの程度上回るという結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

7月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、481グラム（前年同月比2.5%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較では、0.3%減と同水準という結果となった。

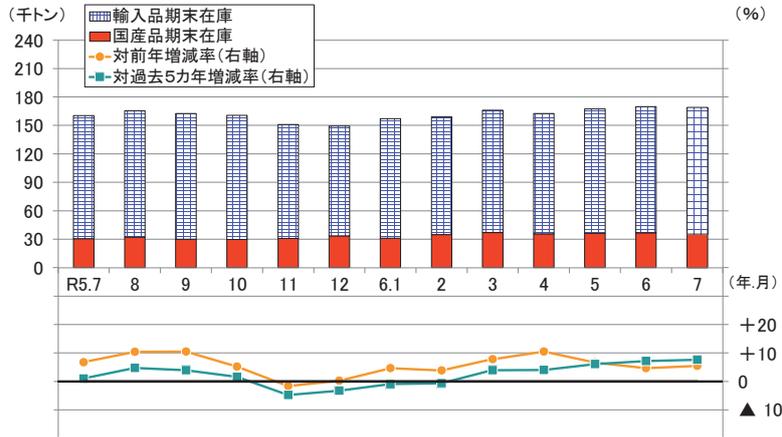
推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫は、16万9062トン

（前年同月比5.5%増）と前年同月をやや上回った（図3）。このうち、輸入品は13万3594トン（同3.1%増）と前年同月をやや上回った。

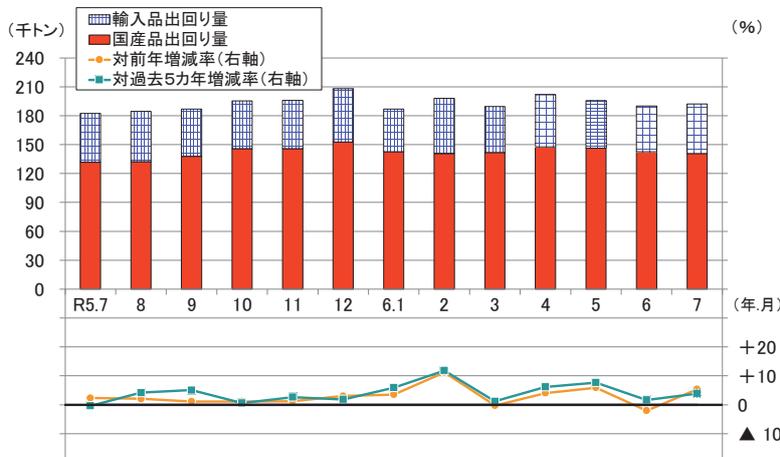
推定出回り量は、19万2220トン（同5.4%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、国産品は14万970トン（同7.1%増）とかなりの程度、輸入品は5万250トン（同1.1%増）とわずかに、いずれも前年同月を上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)

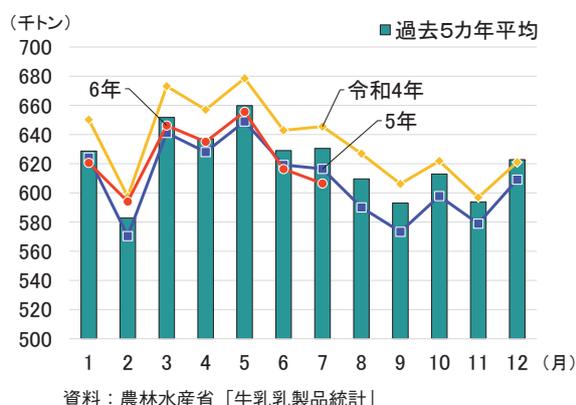
牛乳・乳製品

7月の全国の生乳生産量、2カ月連続で前年同月を下回る

全国の生乳生産量、前年同月比1.7%減

令和6年7月の生乳生産量は、60万6475トン（前年同月比1.7%減）と前年同月を2カ月連続で下回った（図1）。地域別に見ると、北海道では35万5643トン（同0.9%減）と前年同月を2カ月連続で下回り、都府県でも25万832トン（同2.8%減）と4カ月ぶりに下回った。

図1 生乳生産量の推移



7月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは32万6096トン（同2.3%減）と前年同月を5カ月連続で下回ったが、このうち、業務用向けについては2万2778トン（同1.3%増）と2カ月連続で上回った。

乳製品向けは、27万6273トン（同1.2%減）と2カ月連続で下回った。これを品目別

に見ると、クリーム向けは6万1266トン（同4.3%増）と前年同月をやや上回った一方、チーズ向けは3万5569トン（同9.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った。脱脂粉乳・バター等向けも、13万1394トン（同1.9%減）と前年同月をわずかに下回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の牛乳生産量、前年同月をわずかに下回る

7月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は26万1243キロリットル（前年同月比2.0%減）と前年同月をわずかに下回った。成分調整牛乳は1万9001キロリットル（同11.8%減）と前年同月をかなり大きく下回り、加工乳は1万930キロリットル（同3.9%増）と前年同月をやや上回った。

7月のバター生産量、2カ月連続で前年同月を下回る

7月のバターの生産量は、5103トン（前年同月比0.9%減）と前年同月を2カ月連続で下回った（図2）。出回り量は6162トン（同3.5%減）と前年同月をやや下回った（農畜産業振興機構調べ）。7月末の在庫量は、2万7741トン（同4.8%減）と前年同月をやや下回った。（図3）。

図2 バターの生産量の推移

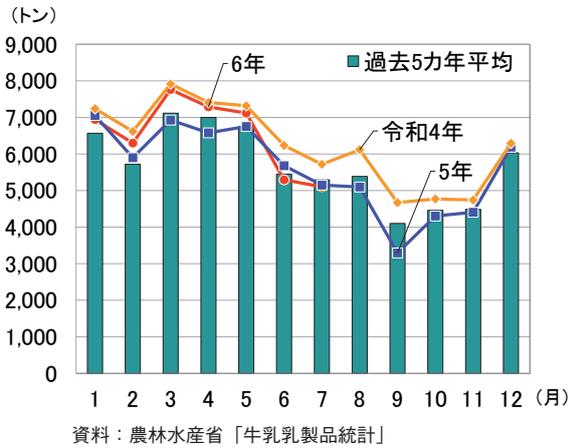


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

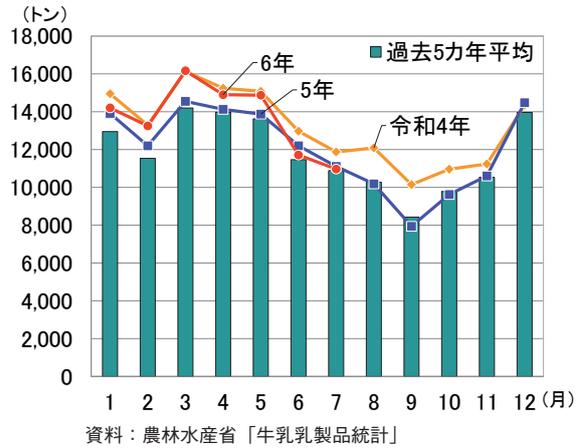


図3 バターの在庫量の推移

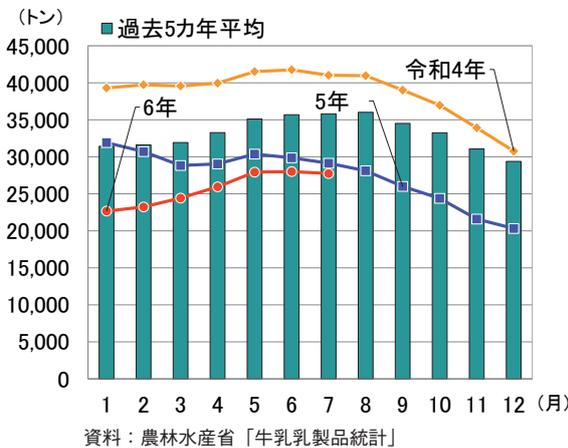
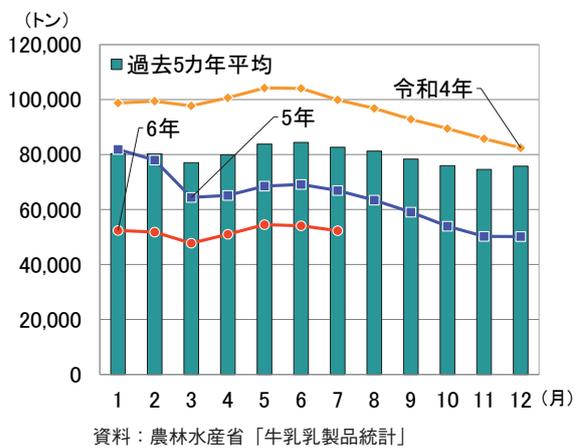


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



7月の脱脂粉乳生産量、2カ月連続で前年同月を下回る

7月の脱脂粉乳の生産量は、1万968トン（前年同月比1.3%減）と前年同月を2カ月連続で下回った（図4）。出回り量は1万2767トン（同4.3%減）と前年同月をやや下回った（農畜産業振興機構調べ）。7月末の在庫量は、5万2281トン（同21.9%減）と前年同月を大幅に下回った（図5）。

令和6年上期の酪農品の輸出量、前年同期比31.7%減

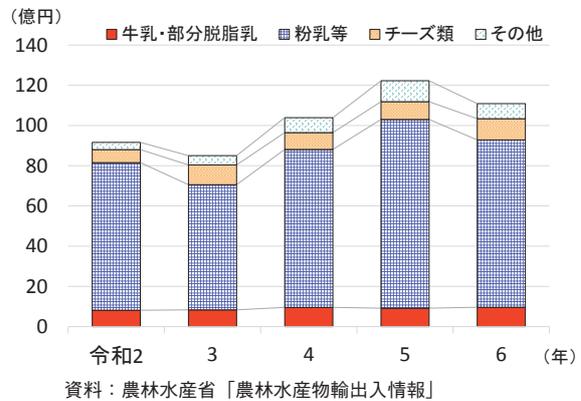
令和6年8月2日に農林水産省が発表した「農林水産物輸出入情報（令和6年6月分）」によると、本年上期（1月～6月）における酪農品の輸出量は、1万19トン（前年同期比31.7%減）と大幅に、輸出額は110億8670万円（同9.3%減）とかなりの程度、前年同期を下回った。国別に見ると、輸出額ベースで最大の輸出相手国はベトナムであり、同国向けの輸出額は64億5038万円（同16.1%増）と前年同期を大幅に、輸出量は3313トン（同9.4%増）と前年同期をかなりの程度上回った。そのうち、乳幼児用調製品

が3201トン（同25.7%増）と全体の9割以上を占めた。

上期累計を品目別に見ると、牛乳・部分脱脂乳は、3491トン（同2.7%減）と前年同期をわずかに下回った一方で、チーズ類は560トン（同14.6%増）と前年同期をかなり大きく上回った。粉乳等は、4809トン（同47.4%減）と前年同期を大幅に下回った。粉乳等の9割近くを占める乳幼児用調製品は4226トン（同10.9%増）と前年同期をかなりの程度上回ったが、その他の粉乳は、583トン（同89.1%減）と大幅に減少しており、これは近年の生・処による対策に伴い

国内在庫量が減少したことなどが要因と考えられる。

図6 酪農品輸出額の推移（1～6月累計）



（酪農乳業部 高橋 沙織）

鶏卵

6年8月の鶏卵卸売価格、前年同月比23.0%安

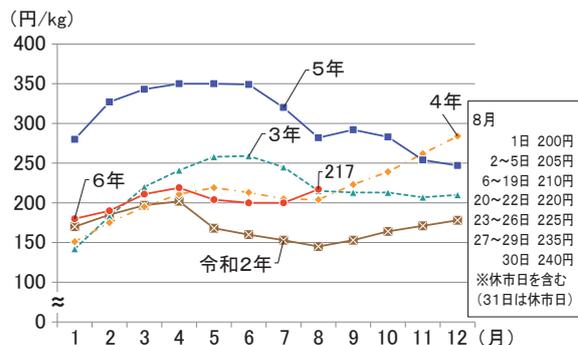
卸売価格

令和6年8月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり217円（前年同月差65円安、前年同月比23.0%安）と、高値で推移した前年同月を大幅に下回った（図1）。なお、同価格は、同200円から同240円まで、月内に6度上昇し、4カ月ぶりに前月の価格から上昇した。また、過去5カ年の8月の平均卸売価格との比較では、9.0%高とかなりの程度上回る結果となった。

供給面を見ると、生産量は、6月24日に事業対象期間が終了した成鶏更新・空舎延長事業^(注)の影響や、猛暑による産卵率および個卵重の低下などから、大玉サイズを中心に減少傾向にある。一方、需要面を見ると、

量販向けは、猛暑による消費減退などから低調な荷動きとなっているものの、加工・業務向けでは、大玉サイズを中心とした引き合いがある中、供給が不足していることから、中玉以下のサイズへのシフトなどが生じている。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



(注) 鶏卵生産者経営安定対策事業の一つであり、一般社団法人日本養鶏協会が実施する事業。同事業は、鶏卵の標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を下回った日の30日(10万羽未満の生産者は40日)前から標準取引価格(日ごと)が安定基準価格を上回る日の前日までに、更新のために成鶏を出荷し、その後60日以上空舎期間を設けた生産者に対して奨励金を交付するものである。

家計消費量

7月の鶏卵の家計消費量(全国1人当たり)は、837グラム(前年同月比2.9%増)と前年同月をわずかに上回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較では、6.8%減とかなりの程度下回る結果となった。

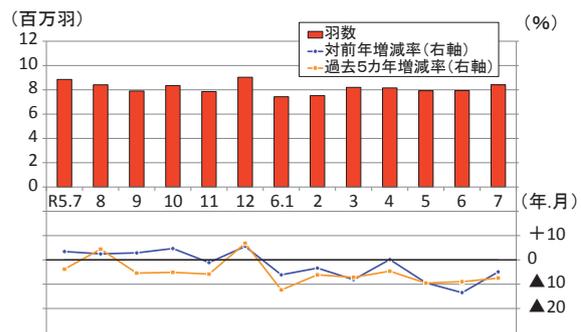
餌付け羽数

7月の採卵用めすの出荷・餌付け羽数は、841万4000羽(前年同月比4.9%減)と前年同月をやや下回った(図2)。

なお、過去5カ年の7月の平均羽数との比較でも、7.5%減とかなりの程度下回る結果となった。

また、1～7月の累計でも、5558万4000羽(前年同期比6.7%減)と前年同期をかなりの程度下回った。

図2 採卵用めすの出荷・餌付け羽数の推移



資料：一般社団法人日本種鶏卵協会「鶏ひなふ化羽数(鶏ひなふ化羽数データ収集調査結果)」
注：報告羽数の集計値であり、全国の推計値ではない。

(畜産振興部 大西 未来)

令和5年「農業物価指数」について

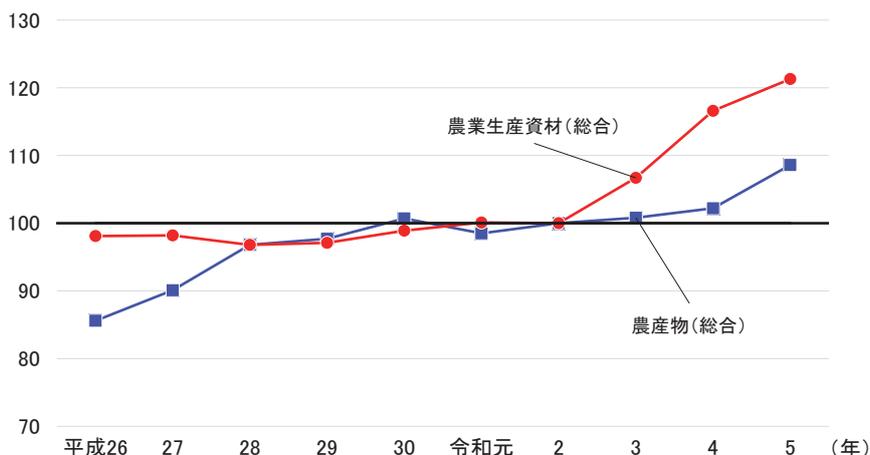
農林水産省が令和6年7月30日に公表した「令和5年農業物価指数—令和2年基準—」について、概要を以下の通り報告する。

農業物価指数とは、農業における投入・産出の物価変動を表すもので、農産物価格指数と農業生産資材価格指数を用いて作成されている。農産物価格指数は、農家が販売する農産物の生産者価格に関する指数であり、農業生産資材価格指数は農家が購入する農業生産資材価格に関する指数である。なお、これらすべての指数は、基準年の令和2年を100とした数値となっている。

5年の農産物価格指数(総合価格指数(以下「総合」という))は、鶏卵、野菜などの

価格が上昇したことにより、前年に比べ6.3%上昇の108.6となった(図1)。農業生産資材価格指数(総合)は、畜産用動物などの価格が低下したものの、飼料、肥料などの価格が上昇したことにより、前年に比べ4.0%上昇の121.3となった。過去10年間の推移を見ると、いずれも上昇傾向にあり、農産物価格指数(総合)、農業生産資材価格指数(総合)ともに、基準年の2年以降、100を上回って推移し、その中でも農業生産資材価格指数(総合)の上昇傾向の方が強く、3年の両指数の差は5.9ポイントであったが、4年は14.4ポイント、5年は12.7ポイントとなった。

図1 農産物（総合）および農業生産資材（総合）の年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農産物価格指数」
注：令和2年=100とする指数。

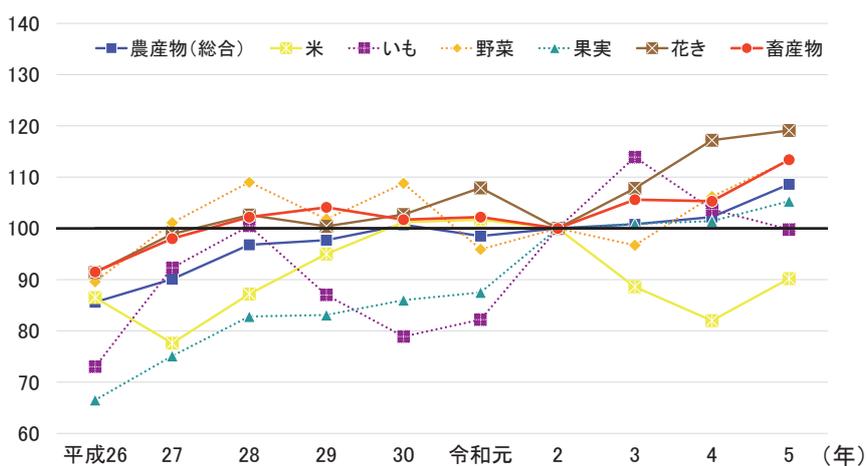
【農産物価格指数】畜産物は前年比7.7%上昇

農産物価格指数^(注1)のうち畜産物を見ると、5年は、子牛の価格が低下した一方、鶏卵の価格が高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）や飼料価格高騰の影響で

出荷量が減少したことなどから上昇したことにより、前年比7.7%上昇の113.4となった（図2、3）。

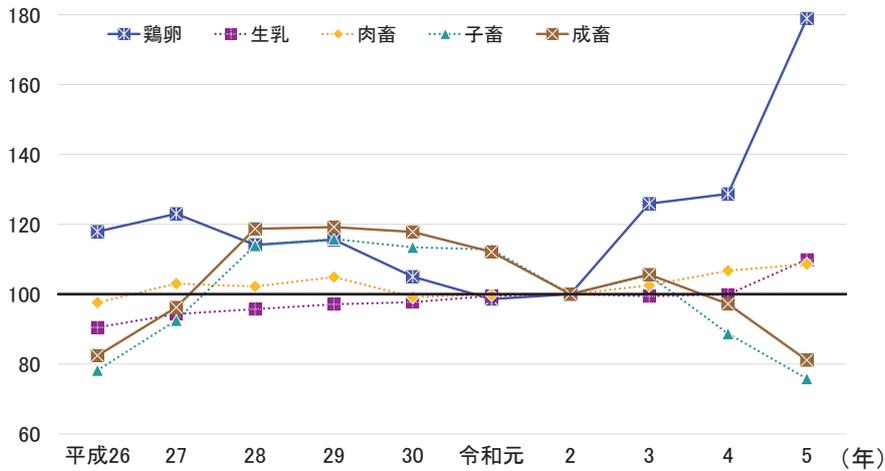
（注1）農産物価格指数（総合）の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、米は15.72、いもは2.74、野菜は24.64、果実は9.66、花きは3.52、畜産物は39.05などとなっている。

図2 主な農産物の類別・年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農産物価格指数」
注：令和2年=100とする指数。

図3 畜産物の品目別・年次別価格指数の推移

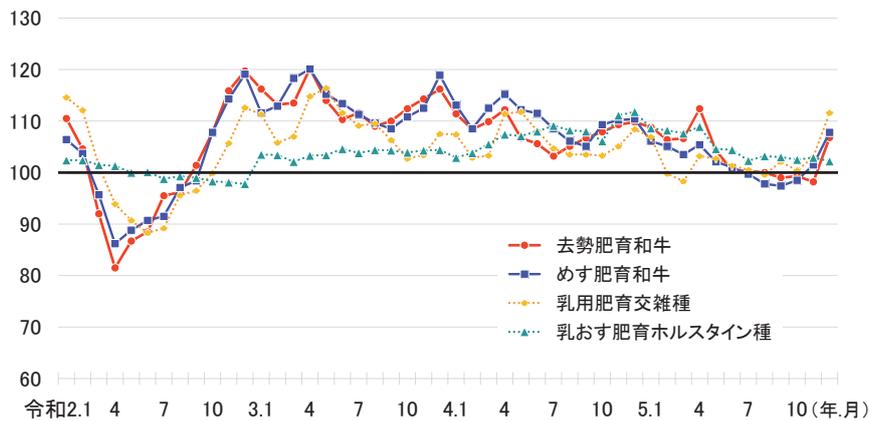


資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年=100とする指数。

畜産物の農産物価格指数のうち肉用牛を見ると、5年は、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりなどの影響により、品種によっては100を下回る月があったものの、年平均では、去勢肥育和牛は同4.2%低下の

103.5、めす肥育和牛は同7.3%低下の102.2、乳用肥育交雑種は同3.5%低下の102.4、乳おす肥育ホルスタイン種は同2.1%低下の105.0となった(図4)。

図4 肉用牛(肉畜)の月別価格指数の推移

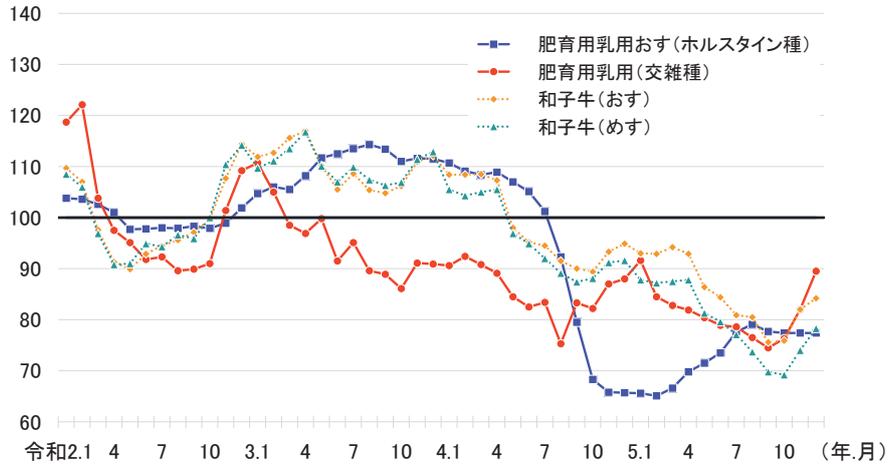


資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年平均=100とする指数。

肥育用乳子牛および和子牛を見ると、5年は、前年からの下落傾向が継続し、全品種がすべての月で100を下回っており、年平均では、肥育用乳用おす(ホルスタイン種)は

同23.3%低下の72.9、肥育用乳用(交雑種)は同5.1%低下の81.4、和子牛(おす)は同13.3%低下の85.3、和子牛(めす)は同17.3%低下の79.5となった(図5)。

図5 肥育用乳子牛および和子牛の月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年平均＝100とする指数。

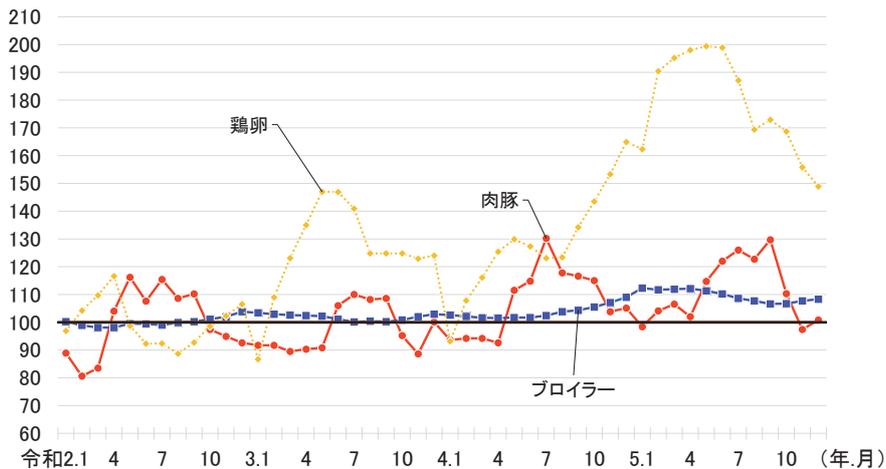
肉豚を見ると、5年は、高騰する輸入品の代替需要に加え、比較的高価な牛肉からの需要のシフトなどを背景に、ほとんどの月で100を上回っており、年平均では、同3.4%上昇の111.2となった（図6）。

ブロイラーを見ると、5年は、継続した堅調な需要により、すべての月で100を上回って

おり、年平均では、同5.8%上昇の109.6となった。

鶏卵を見ると、5年は、前年10月以降に発生したHPAIにより採卵鶏の殺処分が飼養羽数の1割強に上ったことなどの影響から、すべての月で100を大幅に上回っており、年平均では、同39.0%上昇の178.9となった。

図6 肉豚、ブロイラー、鶏卵の月別価格指数の推移

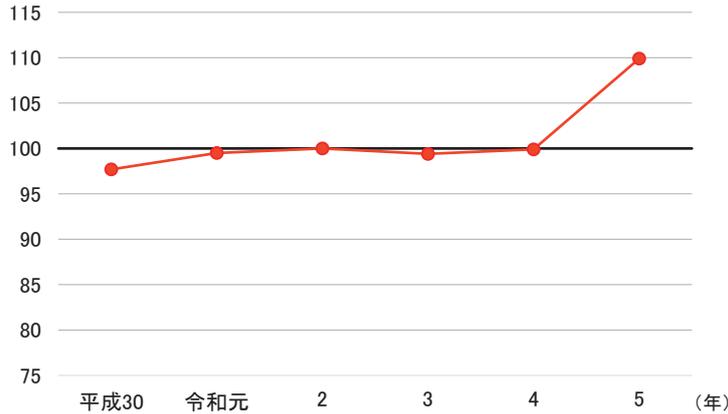


資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年平均＝100とする指数。

生乳は昨年から10.0ポイント上昇して、109.9となり、年次平均としては初めて100を超えた（図7）。これは令和4年11月および令和5年8月に飲用乳価の値上げが行われた

ことが要因であり、令和5年は年間を通じて100を超えて推移し、9月以降は110を超える結果となった。

図7 生乳の年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年=100とする指数。

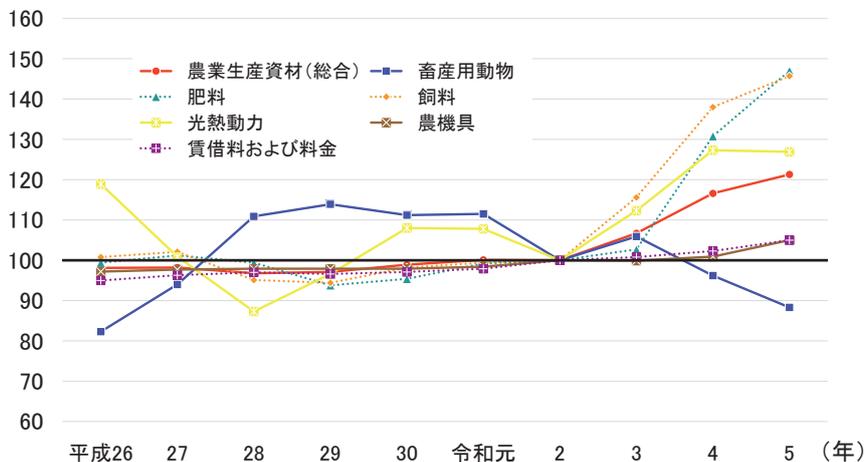
【農業生産資材価格指数】飼料は前年比5.6%上昇

農業生産資材価格指数（総合）^(注2)のうち畜産用動物を見ると、5年は、牛枝肉価格の低下や飼料価格の高騰による子牛購買意欲の低下などにより、前年比8.2%低下の88.3と

なった（図8）。一方、飼料は、輸入原料価格の上昇による配合飼料価格の上昇などにより、同5.6%上昇の145.7となった。

(注2)農業生産資材価格指数(総合)の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、畜産用動物は11.31、肥料は7.76、飼料は22.96、光熱動力は8.50、農機具は13.26、賃借料および料金は6.27などとなっている。

図8 主な農業生産資材の類別・年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年=100とする指数。

飼料の農業生産資材価格指数のうち配合飼料を見ると、5年は、直近では、需給ひっ迫の懸念が後退し、米国や南米の需給などの動向を受けて、トウモロコシ価格の下落傾向がみられるものの、国際情勢や為替相場の影響が継続しており、年平均では、同5.2%上昇の145.7となった(図9)。

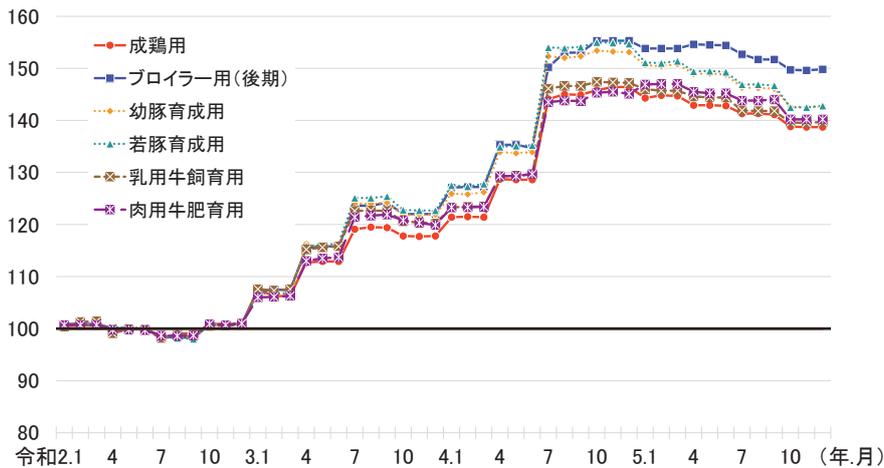
品目別に見ると、いずれもすべての月で100を大幅に上回っており、年平均では、成鶏用は同5.0%上昇の141.9、ブロイラー用(後期)は同7.1%上昇の152.5、幼豚育成用は同4.1%上昇の147.1、若豚育成用は同3.2%上昇の147.5、乳用牛飼育用は同4.6%

上昇の142.9、肉用牛肥育用は同6.4%上昇の144.1となった。

なお、経営コストに占める飼料費の割合は高く、4年では、繁殖牛(子牛生産)は43%、肥育牛は38%、肥育豚は67%、ブロイラー経営は57%、生乳は北海道で46%、都府県で54%、採卵経営は58%となっている^(注3)。

(注3) 資料：農林水産省「飼料をめぐる情勢(令和6年8月)」
繁殖牛(子牛生産)は子牛1頭当たり、肥育牛および肥育豚は1頭当たり、生乳は生乳100キログラム(実搾乳量)当たり、養鶏(ブロイラー経営、採卵経営)は1経営体当たり。

図9 配合飼料の品目別・月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年平均=100とする指数。

(畜産振興部 小森 香穂、酪農乳業部 高橋 沙織)